朋友
For You

沖縄セントラル病院広報誌

2008年8月1日発行　Vol.5

医療法人 寿仁会 沖縄セントラル病院

〒902-0076 沖縄県那覇市与儀1-26-6　TEL.098-854-5511　FAX.098-854-5519

URL http://w1.nirai.ne.jp/o-centh1/　E-mail o-centh1@nirai.ne.jp

Contents

病院長が戦中・戦後の体験から得たもの …… 1

- 幼少時代（沖縄～熊本）…… 1
- 敗戦後の沖縄 …… 3
- 中学時代 …… 3
- 高校時代 …… 4
- 大学時代 …… 4
- 東京から九州へ …… 5
- 再び故郷沖縄へ …… 6
- 開業 …… 6
- 国際医療貢献 …… 7
- 敗戦後、わが国も世界の国々やボランティアから …… 8
  多くの援助を受けて再生することが出来た
- 世界の国々から援助を受けた関東大震災と阪神・淡路大震災 …… 9
- 一般の人々からの国際援助の必要性 …… 9
- 誰にでもできる簡単な国際協力 …… 10
- AMDA沖縄支部の活動経緯 …… 10
- おわりに …… 11

北海道の想い出 …… 14

『KHONG SAD DAU』なんくるないさ …… 15

赴任時の私の抱負 …… 16

第八九〇六号

免許状

正師範　井手妙子

昭和二十三年五月六日生

あなたは本財団実力審査に合格され頭書の指導資格を得られたことを証します

平成十九年九月十九日

財団法人 日本習字教育財団

理事長 原田博至

第五六六五五号

免許状

教授　大仲和江

昭和十二年四月六日生

あなたは本財団実力審査に合格され頭書の指導資格を得られたことを証します

平成十九年十月五日

財団法人 日本習字教育財団

理事長 原田博至

20数年来の研鑽により、寿仁会理事 大仲 和 江 及び
特殊航空身体検査事務担当 井手 妙子 が免状をいただく。おめでとうございます。

AMDA（アジア医師連絡協議会）では、ボランティア・会員を広く募っています。
どなたでも気軽に応募して下さい。

連絡先　沖縄セントラル病院内【AMDA沖縄支部】
TEL.098-854-5511
FAX.098-854-5519

病院長が戦中・戦後の体験から得たもの

（院内講話より抜粋）

理事長・病院長 大仲　良一

イギリスの高名な劇作家バーナード・ショーは、「人間が賢いのはその経験に応じてではない。経験に対する能力に応じてである。」という表現をしている。人はただ経験が多ければそれで賢いという訳ではない。むしろ、経験し体験したことから学び、学んだことを生かす能力がある方が賢いということである。新しい知識を取り込むことは、知的経験である。

しかし、その経験が豊富である程、つまり知識の数だけやたら多いこと、それだけで人間は賢いと言えるだろうか。無論それだけでは不十分である。その知識、経験をもとに考え、それから何か有益なことを生み出す力がなければ、そこにはただ意味の無い知識の蓄積があるだけで終わってしまうであろう。経験や体験に基づいた単なる知識ではなくて、それを生かす知恵が必要なのである。現代の日本人の多くは、マスメディアを介して知識は大変豊富であるが、それを応用する知恵に欠けているのは誠に残念でならない。

昔から温故知新という論語の教えもあります。過去の歴史的事柄や先人の学説、教えなどを学び取り、深く考えながら新しい意識や考えを見つけ出すことで、双方を兼ね合わせることの大切さをいうものであり、東洋も西洋もその説くところは全て同じものである。扨て、あの忌まわしい大戦を体験した人々が高齢を迎えた今日、これまで自らの体験を余り語らずにいたが、戦後六十有余年で、今戦争の悲惨さを後世に伝えねばすべてが風化してしまうという危機感で、今年程多くの方々が“戦後の語りべ”として名乗り出たことは、且ってありませんでした。

そこで、私も戦禍をくぐった語りべ以外にも、このような戦中、戦後の時代があったということを自らの体験を通して語ってみたい。職員の皆様には、これからの私の語りが先刻述べた「温故知新」として受け止められるか、或いは院長の戯言として受け流すか、それぞれの感性に訴えたい。

幼少時代（沖縄～熊本）

夜も明けやらぬ早朝、暗い夜道を子供たちは荷馬車に乗せられ、大人たちは疎開家族のために重い荷物を担ぎ、頭に乗せ、数キロメートルの道程を那覇港まで辿り着く。道中、誰一人多くを語らず、古里の肉親と離れ見知らぬ土地、疎開先への旅立ちという重苦しい雰囲気が、子供心にもひしひしと感じ取れた

ものでした。国民学校（現在の小学校）２年生の時で、多くの犠牲者を出したあの悲劇の疎開船対馬丸と相前後して鹿児島経由熊本へ。

疎開船の船倉は、優に三十度を越す猛暑で、喉は乾き、三度の食事は明けても暮れても“モヤシ”、“モヤシ”で、この先の耐乏生活を予見させているかのようであった。やっとの思いで鹿児島に上陸、一路熊本へ。宇土郡網津村まで約10時間の汽車の旅で、皆が疲れきったところ、村の婦人会の方々が駅で梅干入りの“お握り”と沢庵で私たちを出迎えて下さった。あの白米のお握りの味が未だに忘れられません。しばしの休憩の後、村当局の手配により、疎開者は３つの部落のお寺に配属され、私たち２家族は字平原在の“浄蓮寺”にしばしお世話になる。

人間が生きていくための三要素は、衣・食・住が保たれることであるが、疎開者は出発に先立って荷物の制限があり、また、食・住についても耐乏生活を免れるものではなかった。住まいは、約半年のお寺での生活から、民家の納屋を改装していただいて、やっとプライバシーが保てるようになる。食事は、幸いにして配給米に副食は山野でツワブキ、セリ、山芋、竹の子を四季折々に採り、有明海のハマグリ、サザエ、マテガイなどの貝やタニシ、フナ等で蛋白源を補ったものである。また、それまで味わったことのない栗や椎、グミ、アケビの実は、神様仏様からの賜り物として秋の季節が来るのが待ち遠しかった。薪拾いは子供たちの日課であり、山でこのような野生の果物を探し廻るのは苦しい生活の中でもささやかな楽しみであった。

間もなく寒い冬の到来で、何の備えもない私たち親子（母、弟）は、母が繕ってくれた足袋に自ら編み上げた草履を履き、登校途中、部落の外れで小石を拾い焚で暖め、それをハンカチに包み数時間ポケットに入れ、教室で暖を取ったものである。それでも、多くの疎開児童は霜焼けで手足は赤く腫れ上がり、沖縄では味わったことのない厳しい寒さの中を喘ぎながら登校したものである。

我々が疎開した年は、例年にない寒さだといわれたが、やがて雪も溶け農家の人たちが忙しい春を迎えました。麦の種がやがて芽吹き、伸び出した頃合を見計らって霜柱で浮いた麦を踏みつける。所謂“麦踏み”作業は子供たちの仕事であった。麻で縫った足袋に草履を履き、霜焼けの足の痛さを耐えながら登校前のひとときを過ごしたものである。この様な耐乏生活の中、母は機織りと和裁の技術を生かして現金収入を得る。夜遅くまで働き、お腹を空かして待っていた私たちは、桑の実やグミ、落ちた渋柿で飢えをしのいだものである。

そんなある日のこと、北支から突如熊本へ転属になった父が、夜半に何の前触れもなく訪ねてきた。けたたましく玄関を叩く音“大仲さん、大仲さん”と男の声。母が恐る恐る戸を開けるとそこには大きな荷物を背負った暗闇の中の男性。駅員がわざわざ家まで案内してくださった父親でした。将校の服に長靴、立派な日本刀を腰にかざした軍人でした。母は余りの突然のことに言葉を失い、思わず私と弟を抱きしめ乍ら、しばし茫然と父を眺めていた姿を、今でもはっきりと思い浮かべることが出来ます。

（父親）獣医官当時の大仲氏

沖縄から来た貧しい疎開者として、それまで部落でも学校でも温かい目で迎え入れられてはいたが、戦況が悪くなるにつれ住民の生活も日々苦しさを増し、疎開者に構っておれないという風潮が或る面では見え隠れしていました。

ところが、父の帰還によって、“大仲さんのご主人は立派な将校だったんだ”と、あっという間にニュースが村中に拡がりました。それまで、余り関心を示していなかった村人までがお米や野菜、醤油など日用品が我が家に届けられるようになりました。子供心ながらに人間の損得感情、人情の機微というものを感じ取り、或る面大人に対する不信感、切なさを覚えたものです。そのようなこともあって、敗戦後疎開の後半の2年間は、父の獣医としての技量を生かせる為に阿蘇地方に移転したが、終戦直後の日本は多くの国民が衣食住に事欠き、敗戦による虚脱感に襲われ、戦前の価値観が逆転して生活そのものが荒廃していました。母親たちは、やっと入手したメリケン粉でダンゴをつくり、子供たちは汽車に乗ってその運び屋や売り子になり、また、父親たちが稲ワラで編み上げた米や穀物を入れる俵を担いで、７～８kmもある山道を隣村まで運び、物々交換でその帰り道は米や麦を背負っての重労働を余儀なくされた。そのような中にあっても、ハングリー精神は旺盛で、学校の成績は土地の子供たちに決して引けをとることはなかった。旧制中学入学を目指していたが、６年生のときに敗戦後の沖縄へ。故郷の当時の情報が全くないままに・・・・・。

敗戦後の沖縄

終戦後2年目に長崎は佐世保港から貨物船に乗って古里沖縄への30数時間の旅、国破れて山河なし。那覇港沖の船上から眺める沖縄は、緑が全くない赤茶けた地肌が露わになった誠に無残な光景であった。一昨日まで目にした熊本や長崎の緑の野山とはまるで対照的で、子供心にも驚きを隠せなかった。やがて上陸が許され、軍用トラックで中城村の収容所へ。先ず、DDTによる消毒の洗礼を頭から足の爪先まで受ける。3日後に収容所から故郷の糸満へ。我が家は戦災で跡形もなく、屋敷には艦砲射撃の後も生々しい、直径４～５ｍもあろうかと思われる大きな穴が2ヶ所もある。数年振りに生き残った祖母の元気な姿に、喜びも束の間、伯父、叔母共に戦死したことを知らされる。

疎開先からの引揚げ者は、中城村の久場崎収容所に運ばれ、コニセントやテント小屋に詰め込まれる。（うるま新報より）

伯父は師範学校を卒業し健児学徒と共に、又、叔母は従軍看護婦として日本兵の看護で南部戦線まで追いつめられ、ひめゆり塔の南の丘で戦死したとの事であった。

荒れ果てた屋敷の片隅に、米軍から支給された一張りのテントの中での生活が約一年間続き、次いで茅葺の住い、更にトタン屋根にドラム缶を切り開いて作った素材の壁で半恒久的な住居生活が数年間続いたが、雨の日はトタンに落ちる音で会話が出来ない程で、真夏は屋内でも将に３０℃を超える暑さの中での生活でした。勿論、ガス、水道、電気も皆無の状況下で、子供たちは数百米も離れた共同井戸まで水汲みに三々五々出かけドラム缶を満杯にするのが日課でした。南部一帯は激しい戦闘で立木もすっかり枯れ果て、僅かに残った雑木やすすきを燃料に使い、米軍からの配給によって食料を得て飢えをしのいだものでした。後に述べるが、この頃アメリカや諸外国からの多くの援助物資の恩恵を受け、国民が救われたのは決して忘れてはならないことです。

中学時代

私は、熊本で旧制中学への進学を目指していたが、受験勉強の最中に帰郷した訳ですが、初等学校の7年生の時に、アメリカ式の6、3、3、4

の学制に変わり、新制中学2年生に編入されました。校舎は当初、米軍払い下げの兵舎跡で学び、次いで茅葺のお粗末な校舎で、風雨の激しい日には窓から雨が打ち込み、勿論床も土間で時には泥塗れの中で授業を受けたものです。(現在の発展途上国の映像そのものです。)教科書は、当時の米軍統治下の琉球民政府文教局で作成したガリ版刷りのものでした。日本国民としてではなく、琉球歴史を教わり、音楽の時間はアメリカ、イギリスの国家を始め英語の歌を多く教わったものです。(諸々のスポーツの国際試合で吹奏される国家を聞くにつけ当時のことが思い出されます。)また、国民学校時代の恩師も級友も戦争で亡くなり、終戦後も不発弾の破裂によって幾人かが犠牲になっています。

昭和28年　兼城小学校／茅葺校舎
台風の度に、補修のため父兄、生徒が茅苅りにかりだされる。

昭和26年3月　旧役場玄関址校舎(兼城小学校)
多くの生徒は素足で通学する。奥の建物は職員室と校舎に使われた。

3回連続優勝する陸上選手(2期、3期、4期まで)
茅葺き校舎を背景に運動場にて。後列右から4人目が筆者。

高校時代

高校生活も今顧みるに確かに今昔の念に堪えないものがあります。校舎は米軍払い下げのコンセントに藁葺き校舎で、後に瓦屋根と将に過渡期の高校生活でした。教材はやっと内地と同じものが使われましたが、教科書によっては1クラスに数冊という状況で、級友が替り番こに毎日家庭に持ち帰り、教本を写し取るという有様でした。

我が住いから高校までは約6kmの道程で、朝夕雨の日も風の日も炎天下でも徒歩で通学したものです。それでもハングリー精神でしょうか、苦に感じた事はありませんでした。又、放課後は水汲み、畑の植栽への水肥掛けに明け暮れる。ノートや鉛筆など勉学に最低必要とする備品にも事欠き、様々な工夫をしたものです。その一例として、現在の豊見城城址公園は、且って終戦後は米軍のチリ捨場でした。そこには、廃棄された紙類があり、時折拾い集めその裏紙をリサイクルしたものです。また、その紙を使用するに当たり、最初は鉛筆で書き、時には父が獣医である関係上、米軍から支給された消毒薬としてのマーキュロクムを使い、朱書きで一枚の紙を二重に使ったものです。必要は将に発明の母であることを実感し、工夫次第では多くの事がリサイクルされ効率のよい効果が挙げられる事をその頃から身を以って実体験して来ました。

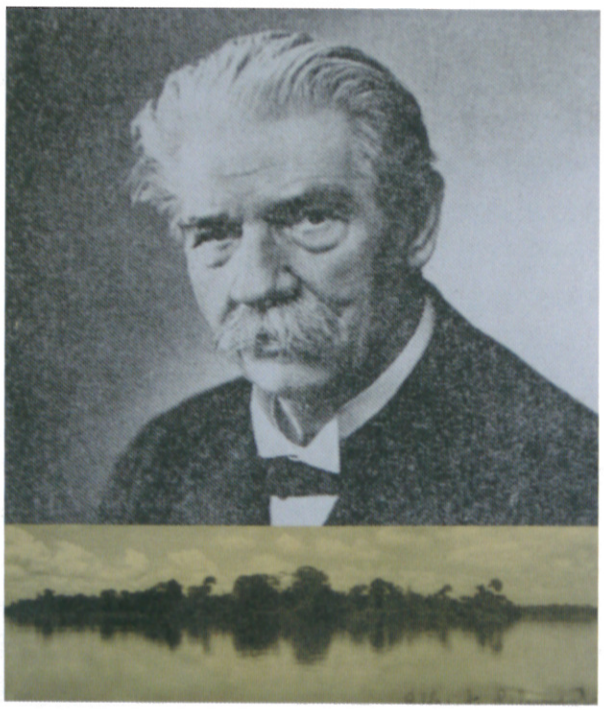
大学時代

やがて、沖縄にも最高学府である琉球大学が首里城跡に開設されました。公共交通機関としてのバスも運行するようになり、時折、糸満から那覇に出ると凛々しく角帽を被った大学生を見るにつけ、愈々自らも･･･と胸を躍らせたものです。当初、父の後を継ぎ獣医師になる夢を抱いていましたが、生憎琉大には獣医学部は設置されないことを知り、内地への留学を目指したものです。米国民政府発行のPass Portを入手し、日本国民である筈の我々が通関手続きをしなければ自由に渡航できない矛盾を感じ

つつ上京したものです。

幸いにして、日本大学医進コース、麻布獣医科大学、日本獣医畜産大学の三大学に首尾よく合格することが出来ました。東京での4年間の学生生活が私の人生観の基盤をつくり上げたといっても決して過言ではありません。最終的に日大医進コースに籍を置き、全国から集まってきた連中に負けまいと我武者羅に勉学に励み、国立国会図書館（現在の赤坂離宮、迎賓館）や、新宿図書館に毎日のように通い、哲学書をはじめ、古今東西の文学書を読みあさったものです。そんな或る日のこと、シュバイツァー博士の伝記に接し、その著作集を読んでいる中に大きな感動と同時に、自らの将来の生き方に一つの示唆を与えてくれました。一冊の本から人生の一大転起のスタートになりました。

早速、父に手紙で獣医から医学の道へ転向したい旨の内容でしたが、間もなく返信がありました。それは、医学の道は厳しい、学資の問題もあるが、お前がその覚悟なら望むところを目指して頑張るように、親子で頑張ろうとの励ましの内容でした。それから1年半の学内浪人の果てに医学への道が開かれたのであります。



アフリカの聖者と称されるアルベルト・シュヴァイツアー博士

東京から九州へ

青春時代の真只中、若き情熱の赴くままに、旧制高校の所謂“蛮から時代”の気風が未だ色濃く残る環境の中で、文学論、人生論、政治経済論や恋愛論を語り合い、一方では高価な医学書購入の為にアルバイトを余儀なくされたものでした。人殺し以外は様々なアルバイトをしたものです。中学生向けの家庭教師、鶴嘴を持っての道路工事、造船所での鉄板担ぎ、犬の散歩、商店街の飾りつけ、極めつけは大学で柔道部に属していたということで、大手ゴム会社、社長宅での、居候での用心棒稼業等々で学費を稼いだものです。

大学の基礎課程を修了して、臨床講義の際に外科学の脇坂教授が私の人生の道しるべとなったシュバイツァー博士のもとで、幾度かに亘って奉仕活動をして居られる事を知り、感動を新たにし全く偶然とはいえ人の運命の機敏を感じ、その時から私の奉仕活動がスタートしたと申しても決して過言ではありません。何の迷いもなく第一外科、脇坂教授の許で薫陶を受けることになる。

在局中、与論島への単身赴任で町民7200人の健康管理を一手に引き受け、早朝から200数十人の診療の後での手術、更に夜間は往診と連日連夜孤軍奮闘、辛難困苦の果てにも大過なく役目を果たせたことは、私のその後の医師としての基本的な在り方を考えさせられ、最も実り多い貴重な体験でありました。帝王切開で子供を出産させ、数年後、親子ではるばる私の勤務先まで挨拶に来てくれた時は、将に医師冥利に尽きるものがありました。

与論診療所（診察室）にて田中婦長と

1日の外来診療を終え、夜間往診での一コマ

その後、西表島や慶良間諸島での無医地区診療と多くの体験を重ねることが出来ました。第一外科在籍中に、標榜科目としての「脳神経外科」が講座として独立した為、4年間の胸・腹部内臓外科、乳腺外科等を修得の上に、更なる最先端の医療である脳外科医を目指して移籍し、愈々厳しい道を歩んで今日に至ったものである。

再び故郷沖縄へ

大学から出向した宮崎県立日南病院での3年間の診療活動を最後に愈々故郷沖縄へ帰る。希望に満ちて帰郷したものの薬剤が不足している情報があった為、出発前に購入し搬送していた薬品、注射液が折からの那覇港湾労働者のストライキの為、一週間も港の炎天下で他の貨物と共にテントの下に放置され、すべての薬品が使用不能になるというアクシデントで、おまけに冷蔵庫も行方不明で初印象の悪い沖縄での第一歩となる。

扨て、沖縄には脳外科担当医が県立那覇病院には不在ということで、県民の為に役立って欲しい旨の県側からの要請があって帰郷したものの、当該病院には脳外科の検査機器は皆無の状態であり、ただちに医療どころではないということで、機器の調整が出来るまでということで、泉崎病院に紹介され赴任いたした次第であります。

開　　業

泉崎病院にて2年間奉職の後、現沖縄セントラル病院の前身である中央脳神経外科を昭和48年に開設する。脳神経外科を標榜している医師は少なく、当時は精神科の患者との振分けに困ったものである。

開業当初から数年間は、1日の外来患者数が400人から600人で、時には700人にも達し、将に殺人的な診療風景で、更に入院35人、地域への往診等で週1～2回は昼食抜きの診療でした。廊下は立錐の余地もない混み合いで2階の階段までも埋め尽くしている有様でした。特に30歳代後半の体力だったからこそ、続けられたものと思います。

祖国復帰後、数年間は、沖縄名物の台風による停電、断水が毎年のようにくり返され地下の水槽は底をつき、長柄のヒシャクでバケツに汲み上げ、厨房まで運び入院患者様の食事をまかない、時には業者から弁当を調達しなければならない状態でした。40人近い職員は、ナース、技師をはじめ皆様が医療に携わる使命感をもって忙しい中にも和気藹々として勤務に励んだものでした。

昭和53年に第一次増改築工事を施行して沖縄セントラル病院に院名を改称し、以来5年毎に増改築、リニューアル工事を重ね現在の病院となり創立36周年を迎えた次第であります。

この間、第一、第二次オイルショック、神武景気、いざなぎ景気と職員の皆様には聞き慣れない状況で、世の中は目まぐるしく変遷してきました。栄枯盛衰は世のならいと言いますが、この間当院にとっても辛難困苦の時代がありました。その都度、心を一つにした職員の協力のもとに他の医療機関との差別化を計り、常にOnly Oneを目指して今日まで曲がりなりにも生き抜いてきました。

現在の世の中は、苦労や難儀、辛いことは避けて通り、リスクを負わず安易に我が道を行く人々が増えていますが、少なくとも20年前の職員は尊い汗と涙を流し乍ら、私を支えてきて下さいました。

そして、今日の病院の基礎を築いてくださったのであります。このホールに居られる職員の皆様はこの礎の上に敷かれたレールの上を歩み続けているということをどうか肝に命じて頂きたい。

世の中は絶えず変化しています。どんどん加速化してきて、今の一年を　Dog　Yearというそうで、犬の一年は人のおよそ7年に相当するという。つまり、今の一年は且っての7年と同じだと言われています。そのように、早いスピードで変わっていく目まぐるしい時代に、病院内部の職員もそれなりの変化が求められるのであります。個々の職員が、旧態依然とした考え方と牛の歩みのスピードでは、時代の流れについて行くのは最早不可能なことです。

開院当初からおよそ十数年の間、つまり職員の数が比較的少ない間はセクションの垣根を越えて、皆が和気藹々として忙しい中にもお互いに助け合い、すべてにアットホーム的雰囲気が保たれていたが、職員の数が増え、時代の変遷と共に人間の価値観も大きく変化し、刹那主義、近視眼的で他人の痛みを解せず自己本位な行動をする輩が巷に増え、誠に悲しむべき世相になって参りました。この様な社会風潮が、院内の職員にも影響を及ぼしている一面があることも否定はいたしません。

今ここで改めて全職員が人間として、医療人としての原点に立ち返って真摯に向き合わねばならない時を迎えています。如何なる時代を迎えようとも、人間が生きる“道”というものの底を流れるものは決して変わってはいけないものと信じます。
我々が歩んでいるこの道は“ひたすら病める人々の為に”あるのです。しかし、病める人々を癒し、救いの手を差し伸べるためには、私たちが先ず健全で安寧とした生活が保障されなくてはなりません。

健全な病院運営が出来るか、職員の飯の糧が完全に保障されるか、結局はその原資は病院の内部にあるのではなく、外部即ち、患者さんやお客様によって得られているという視点に立った職員の認識が必要となってきます。職員皆様の給料は、経営者である私が払っているのではなく、患者さんや顧客によって支払われているという感覚と意識を持って、常に患者さんに対峙して頂きたいということです。

要は、ハード面もさること乍ら、それ以上に今後の医療界はソフト面の充実こそが一層重視され、病院盛衰のキーポイントになることです。各個人が切磋琢磨し、各セクションが競い合ってこそ病院の目標が達成されるものです。

規模の大小、業種業態を問わず患者様・顧客に対応できない医療機関は早晩潰れます。この事は世の中が高度成長であれ、低成長であれ変わらない原則です。今後の我が国は高度成長が望めないだけに、患者さんや顧客への対応の巧拙の差、即ちサービスの良し悪し、コミュニケーションの差がそのまま露骨に業績に反映される時代であることを、特に各種の管理職部課長を先頭に全職員が意識改革する必要があります。而も待ったなしです。誰かがやるだろう、やってもやらなくても変わらない、指示待ち族の集団でぬるま湯にどっぷりつかった体質の職員は今後どんどん淘汰されねばなりません。

一方、気心の合った者同志の排他的活動、所謂セクショナリズムも排除されなければなりません。健全な病院運営の妨げとはなっても益するところは少ないからです。扨て、私は現在院外において十指に近い要職に携わっています。政財界の人々と接する機会も多いが、何処の会合においても沖縄セントラル病院は、何をさて置いても先ず国際貢献が高く評価されています。それと共に、他医療機関との差別化としてのガンマ・ナイフやチャンバーも高く評価されていることは、院内においては中々肌に感じることは出来ませんが、外部にあっては異口同音に高く認知されていることを誇りに思っている次第です。

国際医療貢献

現在、世界中には自然災害や人為的な紛争によって多くの犠牲者や難民が後を立ちません。そして援助を待ちわびています。

私は、1994年10月、AMDA（アジア医師連絡協議会）沖縄支部を発足させました。AMDAの活動目的は、多民族、他宗教、多文化を受け入れる「多様性の共存」と「相互扶助」の精神であり、命を大切にする普通性を推進することで、沖縄のユイマール精神にも相通する人道援助団体であり、現在数少ない国連認定のNGOであり

ます。地球上には、人類を苦しめている多くの疾病が残されています。 今、世界中で4200万の人々がエイズ(HIV)に感染し、その多くが医療の恩恵に浴さない開発途上国に住んでいます。更に、マラリア、結核をはじめとする伝染病が、多くの開発途上国の人々を死の恐怖に直面化させています。

一方、安全な水を得られない人々が世界中で何と10億人もいます。汚れた飲料水と非衛生的な設備のために、毎日6000人の子供たちが死亡しています。(これは、8秒に1人の割合)発展途上国の疾病の80%は汚染された水によるものです。そして、例にもれず子供たちが最大の犠牲者です。開発途上国の人々の、生活環境改善を阻害している大きな問題の一つは教育問題、就中、識字率向上の問題です。驚くべき数字ですが、世界の人口の3分の1に近い約20億の人々は、日常生活に必要な簡単な読み書きや計算能力を持っていないのです。生活の糧を得る大きな手段である能力を持ち合わせていないということは、情報処理に欠け、ますます不利な立場におかれます。

我が国も去る大戦終結後は多くの国民が貧困を味わい、特に我が沖縄は国内での唯一の地上戦で20数万人の犠牲者をだし、異民族の為政下で筆舌につくせない辛難困苦を味わいました。今、地域紛争による難民、犠牲者や大自然の災害による被災者の姿をメディア映像で見るにつけ、自らの戦中戦後の実体験がまるで走馬灯のように思い出されます。

沖縄も我が国も素晴らしい発展をとげ、今日の豊かな生活を満喫するようになりましたが、これは、終戦直後から数年間に及ぶ世界各国からの心暖まる支援があったからこそ、現在があることを忘れてはなりません。世界各国からの強力な援助活動の詳細について、その概要を述べたい。

敗戦後、わが国も世界の国々やボランティアから多くの援助を受けて再生することが出来た!

我が国は去る大戦で、産業はほぼ壊滅状態となり残ったのは焦土と化した国土と、すべてに自信を失い虚無感に陥った国民であり、貧困をたっぷりと味わった。そのような耐乏生活の最中に、我が国は多くの国や民間団体から経済援助や資金、物資の支援を受けて、やっと先進工業国の仲間入りを果たすことが出来たのである。

年輩の方々には記憶に新しいものがあると思うが、例えば、アメリカ政府の援助であるガリオア基金、エアロ基金による恩恵は計り知れないものであった。現代の若い層の人々には、殆ど知られないことであろうが、これらの援助額は当時の金額で約18億ドル(現在の貨幣価値で約12兆円)にも達し、これらの援助がなければ、我が国は未だに開発途上国の一員であったことも否定はできない。

また当時の世界銀行への恩義も決して忘れてはならないものである。敗戦後も高い教育を受け、腕に技術を持った国民はいたが、壊滅状態の産業を復興する資金がなかった我が国にとっては、将に干天の慈雨であった。

国家の基礎体力がつき、東海道新幹線や黒部第四ダム等を次々に建設し、先進工業国への道を進み、国家発展のバロメーターでもある東京オリンピックも成功裏に終えることが出来た。つまり、我が国は世界で最もお世話になった被援助大国の一つであったことをすべての国民が理解し、忘れてはならないことである。ユニセフという言葉は、すでに多くの人々がご存知でしょう。歌手のアグネス・チャンが現在の国連親善大使として発展途上国の難民や、自然災害で被害を被った国の子供たちのための支援活動を積極的に行っています。実は、敗戦後の日本を援助することを最初に決定し、実行した国連機関はユニセフだったのです。当時、継続して10年間にわたって約65億円(現在の貨幣価値で約1300億円)もの援助を受けており、当時の親善大使があの「ローマの休日」で有名なオードリーヘップバーンさんでした。

更に、我が国の子供たちを救ってくれた物資に「ララ物資」と「ケア物資」があり、沖縄の子供たちも大変お世話になったものである。食料や医薬品、日用品等が不足していた日本の子供たちを救って下さった国際ボランティア団体

(NGO)からの援助物資のことである。終戦直後1946年から6年間にわたって当時の金額にして約400億円にも上がるといわれている。

戦後の絶望的な混乱期に多くの日本人に夢と希望を与えて下さった「ララ物資」と「ケア物資」は、多くの民間人や、ボランティア団体の善意と友情によるものであり、決して忘れてはならないものである。次のようなエピソードもあります。それは、アメリカのフィラデルフィアの学校では週に1回お昼の食事を抜いて、そのランチ代金を募金して、飢えに苦しむ日本の子供たちに送る日にしたということです。ララとケアの物資の中には医薬品もありましたが、戦後の日本の衛生状態、食料事情は極端に悪く、多くの子供たちは栄養失調と病気に苦しんでいたのであり、当時の乳幼児の死亡率は現在の開発途上国のそれと同じ状態でありました。

世界の国々から援助を受けた関東大震災と阪神・淡路大震災

自然災害は毎年のように世界各地で絶え間なく起こっている。それに加えて人為的な災害として、地域紛争も絶えることがない。今を去る80余年前、1923年9月に起こった関東大震災では、わが国に世界の国々から援助の手が差しのべられた。緊急時は一刻も早い支援が必要であるが、その中でも速さと規模の大きさで抜きんでていたのはアメリカからの支援であった。丁度マニラ湾に停泊中のアメリカ艦隊は、大統領の命令を受け援助物資を満載して横浜に急行した。更に米国赤十字をはじめ、民間団体などが一体となって日本のために募金をし、医薬品や毛布などの援助物資や食料品を迅速に贈ってくれたのである。また、当時の先進国は言うに及ばず、開発途上にある50数カ国から暖かい援助の手が差しのべられている。その中には、近年紛争で国際的に注目を浴びた旧ユーゴスラビアを構成していたクロアチア・セルビア・スロベニアの名前もあげられている。東アジアの大変小さな島国で起こった未曾有の大災害を見過ごすことなく援助物資や義援金を送ってくれたのである。現在、このような国々が傷つき苦しんでいるのを知りながら、何の援助の手もわれわれが差しのべなければ、且つて大変お世話になった恩義を踏みにじるものであり、それはまた国際社会の一員として恥ずべきことではないか。

私は、今日までに既に30数国の旅をしてきたが、特に東南アジアや中南米の発展途上国の実情を目の当たりにするにつけ、自らの幼い頃の苦しかった思いがよぎり、何か目に見える援助の手を差しのべなければ・・・という感を深くするものである。

今、世界のどこかで一日に14,000人が新たなエイズ・ウィルスに感染し、そして年間300万人(1日84人)が死亡している。(2004年国連エイズ合同計算報告より)また1分間に1人の女性が妊娠・出産が原因で命をおとし、一方4人の子供たちが1歳の誕生日を迎えることなく死亡している。これらは世界の保健医療問題のほんの一部でしかない。しかも、その殆んどが発展途上国で起きている。その背景にある問題点はエイズの場合、識字率が低く性感染症に対する知識に乏しいことである。一方、子供達の死亡原因は様々だが、水を媒介とする感染症によるものが多い。発展途上国では「安全な水」と「清潔な環境」があるだけで子供の死亡率が40%も改善されるのである。世界中で子供の命を守るために、様々な予防接種が実施されているが、中にはポリオワクチンのように大きな成果を上げているものもある。十数年前に自らインドに赴き、ポリオの実態調査とワクチンの摂取を実施し地球上からポリオを撲滅するWHOの企画に直接参加し得たことを誇りに思っている次第である。

一般の人々からの国際支援の必要性

日本人は、生活は豊かになったがコミュニティーの結びつきが弱くなり、高齢化社会とか少子化社会とかいわれる中で、バラバラな個人が自分に関わる問題に精一杯対処しているというのが日々の生活です。実に寂しい個人が増えています。「連帯」「ゆいまーる」という言葉が、若い人の間ではもう死語になっているように

思えて仕方がありません。それが、子供たちの世界に鋭く反映しているように思います。

昨今の凶悪犯罪の低年齢化が端的にそれを物語っています。貧しい途上国に行くと、昔の日本、地域で、家族で、職場で助け合った相互扶助の姿を思い起こすことができます。日本人が忘れかけている「人の尊厳」というものが呼び覚まされます。

衣食住すべてに事足りて、日頃、開発途上国の人々の生活に余り関心を持たない人々でも、マスメディア等を介して貧しい国の人々の生活実態がわかれば、その時は自分の生活のほんの少しを切り詰めたり、節約することで浮いた金銭を途上国の子供たちの奨学金に廻すことが出来るのです。

友人とビフテキを食べる代わりにラーメンにすることによって1,000円程度の金が浮き、禁煙をしたり、晩酌の量を少し減らすことによって国際援助の財源が出てくるものです。要は一人一人の心の持ち方です。そしてそれを実践することが出来るか否かの問題なのです。

誰にでも出来る簡単な国際協力

いかなる人でも平和を求めない人は居ないであろう。自分や子孫のために将来の幸せを願っている。阪神・淡路大震災で、また、インドネシアの大津波で、更に中国四川省で起きた未曾有の大地震の映像を目の当たりにするにつけ、何か手助けをしてあげたいと願うのが人としての心情でしょう。しかしながら、個人として何が出来るか。多くの人は直接行動に移せないのではないか？海外でボランティア活動をするには、それなりの技術を持っていかなければならないし、言葉の問題をはじめ色々な制約があります。

しかし、海外に出ることだけがボランティアではないのです。それは、多くのNGO、NPOの中から自分の考えに合う団体を選び、会員になることです。会員になれば、そこの活動を通して直接、間接に国際協力に携わる事ができます。

会員になるのが億劫だと思う人は、様々な募金活動が行われているので、自分の財布と相談の上、10円でも100円でも金銭による貢献をしたらよい。金銭的な余裕がないけど、時間ならという人はNGOでボランティア活動が考えられる。何処のNGOでも、人と時間とお金が足りないからボランティアは大歓迎である。お金も時間もない方々には、せめて世の中には自分より恵まれない人々が多くいることを察して、支援するボランティアに何かしてあげたいという気持ちを持っていただくことが出来ます。

そして、余裕が出来たら是非参加していただきたい。今、平穏で安寧な生活を送っているあなたにも、いつ災害が襲ってくるか知れないのです。

AMDA沖縄支部の活動経緯

① 1994(平成6)年　AMDA沖縄支部設立

② 1996(平成8)年　国際奉仕：ボスニア・ヘルツェゴビナ国より「PTSD」治療研修のため、ストジャコビッチ・ミラン医師を受け入れる。
(沖縄セントラル病院ならびに琉大病院にて研修)

③ 1997(平成9)年　国際奉仕：フィリピン国新設病院へ医療用のベッド140床を寄贈。
(海運会社 有村産業による無料搬送)

④ 1997(平成9)年　国際奉仕:ペルー国、リマ市在、孤児院院長シスター又吉さん入院治療
ボランティア奉仕活動(沖縄セントラル病院)

⑤ 1997(平成9)年　ペルー国、リマ市における学校建設支援活動。

⑥ 1998(平成10)年 国際奉仕:ニカラグワ国におけるハリケーン
洪水被災者に対する緊急救援活動。
(沖縄セントラル病院Dr.ルイス渡久地及びNs.大城なつ子 2週間派遣)

⑦ 2000(平成12)年 国際奉仕:インド北部大震災に毛布290枚を緊急支援
(航空会社JTA社による無料空輸に多謝)

⑧ 2000(平成12)年 ラオス国へ医療実態調査(沖縄セントラル病院:大仲院長)

⑨ 2000(平成12)年 国際奉仕:エルサルバドル共和国大震災へ緊急支援活動。
(医師:比屋根 勉)

⑩ 2001(平成13)年 国際奉仕:ラオス共和国より医師、検査技師を研修受け入れ
(沖縄セントラル病院・糸数産婦人科・県立那覇病院)

⑪ 2002(平成14)年 国際奉仕:ラオス共和国へ医療機器(心電計・他)
医療消耗品を寄贈(長嶺胃腸科内科外科医院
医師:長嶺信夫　コーヨー薬品KK)

⑫ 2003(平成15)年 国際奉仕:フィリピン国へ医療機器(腹部超音波診断装置)を寄贈
(沖縄セントラル病院)

⑬ インドネシア沖地震大水害への緊急支援活動(看護師:大城七子・医薬品)

⑭ グアテマラ・ハリケーン被害者支援(医師:渡久地 ルイス 派遣)

おわりに

私たち日本人は、今、飽食の時代の真只中にあり、すべてにおいて贅沢を極め、メタボリック・シンドローム、やれ一方ではダイエットと誠に悲しく憂うべき現実が巷に氾濫しています。戦後60年にして、平和呆気の付けが廻ってきました。現在、我が国の人々は貧困の苦しみというものがどういうものか？身を以って知ることが難しいし、生命の安全は当然だと思って生活をしている人々が大半である。(最近の世相は、無差別殺人等で変わりつつあるが･･･)

しかし、世界中には病気と飢えで苦しみ、最大の弱者である子供たちが命を失い、罪のない人々が紛争地で犠牲になり、自然の大災害による被災者がこの地球上に数多くある現実から目をそらすことがないことを願っています。

私共沖縄セントラル病院は、AMDA沖縄支部と共に県民、地域住民への医療、保健、福祉活動はもとより、これからも国際奉仕活動に微力を尽くして参る所存であります。

特に医師、看護師、コメディカルスタッフの皆様をはじめ、地域の方々、企業の皆様、定年退職の方々、学生生徒を含めたすべての県民のご理解とご支援を賜りたい。

医療、福祉をはじめ教育問題や、激しく波打ち悲しむべき風潮にかわりつつある現代社会を憂い、敗戦後の耐乏生活に思いを馳せ、すべての国民が今一度歩みを止めて自らの足許を見直し、「他人の痛み」を知る人が増えてくることを願いつつ筆を置く。

(文中の数字や国際貢献については、本部菅波理事長の活動方針や内容を一部引用していることを付記する。多謝)

ただ見れば　何の苦もなき水鳥の
足に暇なき　我が思いかな

◎人生にはリハーサルはない。すべて本番である。

◎自分の人生は、他人に挑戦する必要はない。自分自身に挑戦することだ。
己の過去に挑戦し、少しでも昨日よりは良い明日の自分を形作る為に。

◎徳利にも一升入りのものもあれば、2合入りのものもある。
そして、2合徳利でも一杯満つれば一升入りの空徳利に勝る。
人間も同じだ。(新渡戸稲造)

◎治療方針で半端な妥協は禁物
「患者本位」ということは、患者オールマイティーとは訳が違う。
医師やナースはプロとして、素人である患者から委任を受け、
患者にとって代わって患者の為にベストな医療を施すこと。
これが患者本位の中身であって、決して患者の要望に盲従することではない。

◎一度限りの人生は、なしくずしに生きていくものではない。
生きることは人生に燃えることである。人生に賭ける事である。
冒険とは自分への挑戦。日常生活の中の自分自身への挑戦のことである。
「一期一会」　人との出逢いのかけがえのない縁を大切に、人の一生には
二度と同じことはない。明日有りと思わず、その場その時を大切にしたいもの。

◎組織体制の中で、常に従順では進歩は望めない。
自分自身が体制の中へ入りながら更に前進するには、体制を否定するので
はなく、その中でより一歩前進するためにはどうしたらよいのか、
ということを考え実行することが大切である。

◎誰でも時には熱心になる。ある人の熱心は3日。ある人は3ヶ月。ある人は3年。
しかし、人生で成功するのは30年の熱意を持ち続ける人である。
(成功の鍵:エドワード・バトラー)
成功するには条件などありません。強いて条件をあげれば
「最後まで実行するかしないか。である。

天の時　地の利　人の和

如何に困難な問題であっても、放置したり回避したりしないで、解決の道を求めて努力しなければならない。今、我々に求められているのは、これらの問題を十二分に吟味し、一日も早く明日の医療への正しい指針を手にすることである。いつの時代でも、人々は明日に対する希望と不安を抱きながら、歴史を織り成してきました。ところが、目まぐるしく変化する現代では、今日への対応に追われて、明日を語る余裕を失うようになりがちである。
しかし、急激に変化し続ける今日の不確実性を乗り切る為にも、明日を論じ、将来と現在をつなげると共に、明るい将来への展望を開く必要がある。

職員からの意見、具申に対して、正しくないことであればどんな小さいことでも排除し、良いことはどんな小さいことでも奨励していきたい。

今は、サービスは当たり前の時代です。そして、お客様を感動させるのは、マニュアルにはない人間対人間の心のこもったサービスです。

信　愛　敬
すべてを善意に受けとめる

● もったいない!!

環境分野で初のノーベル平和賞受賞で元ケニア副環境相、ワンガリ・マータイが発言した日本語の「もったいない」は世界的に有名になりました。
飲食、贅沢、ものを粗末にする風潮に対する痛烈な批判がその根底に秘められている。職員も反省し、家庭で、職場でもったいない精神を実行に移そうではないか。

● すべてリサイクルを！！

電気。水道。物品。食料等々。

● 職員の自己テストの徹底！！

改めて現実の問題として各個人が真剣に取り組みましょう。

北海道の想い出

副院長　堀川　恭偉

北海道は帯広で、1年半を過ごし、久しぶりに沖縄に帰ってきた。常夏の熱風を浴びると、つい数ヶ月前まで雪がちらついていた北海道が恋しくなる。思い起こせば南の端から北の端へ移動したのは、一昨年の初秋であった。

北海道と言えば鮭。鮭が川を上る姿をこの眼で見てみたいと思い医局の釣り好きの先生に尋ねると「それならシベツへ行ったらいい」と聞かされた。根室と知床の間の町らしいが、地図を広げても一向に判らない。丹念にさがしてみると「あった、あった。」標津（シベツ）。北海道も沖縄と同じで、読みにくい地名が多い。アイヌ語に当て字をしているためであろう。シレトコにしたって知床とは、知らない人には想像もできない。帯広の隣の町に音更という町がある。振興住宅地でちょっとしゃれた街並みである。これをなんと読むのだろうがというと、オトフケだそうだ。また、帯広から南に1時間ほど車を走らせるとナウマン象の化石が発見された有名な町がある。虫類と看板に書いてある。なんと読むのかといえばチュウルイだそうだ。左程に、面白い地名の散在する北の大地を、沖縄から運び込んだパジェロミニを駆使してシベツまで行った。途中、赤や黄色の紅葉が山肌を埋めていた。沖縄では経験できない風景である。この紅葉は10月になると里や街中に入り込んでくる。それはもう「見事」と膝をたたいてしまう。公園しかり、川べりや町外れだけでなく街路樹までが鮮やかに色づくのである。銀杏並木、姫りんごの街路樹、白樺の林など万華鏡の中を歩いているかのようである。

帯広から、歌手の松山千春のふるさとで知られる足寄（アショロ）を通り、阿寒を過ぎて、ただただ東へ向けてパジェロを駆けていく。ちょっとした大陸横断である。海などはまったく見えず、丘陵を駆け抜けていくさまは沖縄では味わえない。一面の牧草の片隅で牛が草を食む姿や、馬が数頭群れをなして走っている姿は眼を釘付けにする。しばし車を止めて眺めてみるのもいいものだ。丘陵を過ぎると、果てしない平地に入り込む。一面のトウモロコシ畑やジャガイモ畑、ときにひまわりの畑に遭遇する。これを空から見ると黄色やピンク、緑の四角い帯を基盤の目のように繋ぎ合わせた派手なパッチワークのように見えるから楽しい限りである。北海道旅行の際は、着陸前に飛行機の窓からこの景色を堪能あれ。

標津のサーモン科学館は標津川に隣接していた。遡上してくる鮭を捕獲して卵を取り出し、孵化した後に、稚魚を放流する養殖産業を大規模に行っているそうだ。その施設の一部を利用してサケマスの生態観察ができるようにガラス張りにしているのである。標津川には開閉式のダムが設けられていた。鮭の遡上を止める背の低いダムである。ダムの上にかけられた橋を歩いていると、川面に黒くうごめくものがあった。よく見ると無数である。鮭であった。中には元気なやつも居て、ダムを飛び越えようと高く跳ねる魚もいる。肌寒い風に吹かれながら川岸に下りたり橋の上を行ったり来たりしながら川面を見つめていたがダムを超えたのは1匹だけであった。その他の無数の鮭は、ダムの川下で列を成して性懲りもなく泳ぎ続けていた。ふと見るとダムの端に、水路が設けられていることに気がついた。幅は1m程の水路で、遠くサーモン科学館の後方へと続いていた。そこには巨大水槽があった。なるほど、の仕掛けである。

日の暮れないうちにと、標津を後にして、羅臼（ラウス）へ向かった。あらかじめ、院長にお願いして、根室や知床の界隈で、いい宿泊施設を紹介して頂いたのだ。院長も釣り好きで、知床半島突端でのつりの際にはよく利用しているという。「嵯峨」という民宿である。非常に気の優しい女将さんで安心していいよと太鼓判を押された。確かに、すごい。沖縄のオバーを連想させるようなもてなし振りであった。2階建ての小さな民宿は、1階が食堂で、2階には3つほどの部屋がふすまで仕切られているだけである。工事関係の男たちがすでに数名泊まっていた。彼らの食事が終わると、われわれの番である。1階のたたみ間には6人がけの食台がひとつ置かれていた。
それほど寒い気候とも思われないが、奥にはストーブが焚かれていた。北海道の人は寒さに弱いのか強いのかわからない。食台の上には、所狭しと、ホッケの開き、イクラの醤油づけ、蕗や薇の浅漬け、鮭の焼き物、ジャガイモの煮付けなど、そしてご飯はお替り自由ときている。この女将さんの娘が沖縄で看護婦をしてるらしく話しが弾んだ。沖縄のかめかめバーさんよろしく勧められるがままにたらふく食してしまった。

食後の散歩でもと、川べりにいくと、野生の鹿が、1匹立っていた。牡鹿である。立派な角を生やして、こちらをじっと見つめていた。どう出るのか、近づいてみた。

10mまで近づいたが、一向に逃げる様子がない。そういえば、女将が、鹿が最近は増えて、困っているのだと話していた。夜になると鹿が山から町に下りてきて、店の前に植えてある花を食べてしまうのだそうだ。結構な群れをなして行き過ぎるようで、夜の街を闊歩する鹿は奇妙である。そして今、目の前にその鹿が物怖じもせずに立っているではないか。そういえば、キタキツネもパーキングエリアで、車の周りをうろうろしてえさをねだっていたことが思い出される。野生の動物といえども危害を加えられる心配がなければ結構人なつくものだ。一定の距離は測るものの。

翌朝、知床半島を一周した。国後島が間近に見える。辺戸岬から与論島が見えるようなものではない。もっと間近である。よく晴れた日なら、鉄砲を担いだロシア兵が見えるかもしれない距離である。

羅臼の港を出る漁船は国後を横目で見ながら出港するのだろうと思うと、国境を感じる。「国境侵犯で拿捕」などのニュースをマスコミで耳にすることはあったが、港からこうも国境が近いとは想像もできなかった。

一路、陸路を駆け抜けて帯広に到着したのはその日の夜であった。初秋の9月の一泊二日の長旅であった。長いようでもあり、短いようでもあった北海道での仕事を終えて沖縄にやってきたのは、沖縄セントラル病院の大仲先生のAMDAの活動に共鳴したからである。ADMA（アジア医師連絡協議会）は岡山県で産声を上げてすでに30年以上を経ており、沖縄県に支部が設立されたのは13年前である。国連のNGO団体として認可もされ、由緒のある機関である。

先のミャンマーでのサイクロン被害や、中国四川省での地震の際は、AMDAからも支援隊が派遣されたようである。私も、広い世界を舞台に活動をしてみたいと思うのである。

『KHONG SAO DAU』なんくるないさ

内科医師 ド・カク・ニャン

私はド・カク・ニャン（DO KHAC KHAN）と申します。1987年12月6日にベトナムのホーチミン市（旧名サイゴン）で、会社員の父親と専業主婦の母親の長男として生まれました。1975年ベトナム戦争が終わった間もない頃で、自国が復興に向けて懸命に努力した非常に貧しい時期で、また子供ができても育つのが難しい時期でした。お米などなく（ボボー）というそれでも当時貴重な雑穀を主食に育ちました。なので、この私たち同世代の子供たちのニックネームは通称（ボー）と呼ばれています。また、私が1歳の頃、母が病気になり、私は近所の妊婦さんの母乳をもらって育てられたそうです。

私がお医者さんを志したのは、私が中学に入学する当時、テレビで、日本のニュースが流れていて、ベトちゃん・ドクちゃんの話にある日本医療の素晴らしい技術を目にした時の頃からです。というのは、実は、私の育った環境にはベトちゃん・ドクちゃんほどではありませんが、アメリカからの枯れ葉剤兵器の被害を受けた同級生や友達が少なからずいました。私は、この頃から日本の医療技術は一体どのようなものかという強い好奇心を持つのですが、日本に留学すると言うことは、遠い夢で、結局、地元の大学の方へ進みましたが、やはり志を捨てきれずにいました。大学生活を送っていたある日、私の叔父が日本で医師として活躍していることを知り、通っていた地元の大学を中退し、同時に、その叔父さんを説得し、保証人となっていただいて、遠い夢だった日本に志をもって来日することができたのでした。それから一年間、東京都に在住し、日本語学校に通いながら医学部を目指し大学合格に向けて日々受験勉強を励みました。そして一年後、1999年4月から愛媛大学に合格し、金銭面では日本のロータリークラブやボランティア団体から奨学金などの援助を受けて無事6年間で医学部を卒業できたのです。現在も私が医療関係の仕事に就けるのも日本国のお陰であり、本当に感謝しています。

大学を卒業した私は愛媛県の松山赤十字病院や愛媛大学付属病院で2年間研修医として働かせていただきました。その後、母親の看病をする為などの家族の事情で、ベトナムではなく、今現在も両親はオーストラリアに移住しているのですが、その両親の元に帰り、およそ一年間オーストラリアの医師国家試験の勉強をしていま

した。そして再び、日本の知人からの紹介で日本へ行って働く機会を得た私は、幸い、私の生まれ育ったベトナム国と風土や気候などが似た沖縄県に来て、セントラル病院で働かせていただけることになりました。他には、スコールがよく降ることや食べ物では豚肉をよく食べることなど祖国ベトナムとよく似ていて、人柄にも「なんくるないさ」と心に余裕を持って接していただける沖縄の方々の中で、親しみと感謝の気持ちを私はとても感じています。

現在、私は内科医としてここへ来て３ヶ月になりましたが、慣れない私を沢山の関係する方々が支えになっていただいて、病院のスタッフの方々には、未熟な私を情熱を持ってご指導いただく中で今日に至ります。

将来はこれまでの皆様との出会いの中で、医療にとどまらず、この地沖縄で祖国ベトナムとの架け橋になれるよう、そして、日本国の恩返しができるように強く思っています。そして、医療人として世界平和に貢献できるよう頑張って参りたいと思います。

赴任時の私の抱負

総務部長兼医療業務部長　宮　城　孝　光

私の、入職決定日は平成20年6月1日付け、と決定され、役職は総務部長兼医療業務部長ということで院長先生から説明を受けました。

私は、しめたと思いました。院長先生の病院運営のお手伝いをするのに、絶好のポジションだと思ったからです。自分が長年培ってきた医事業務の経験と管理者としての経験を十二分に発揮できると自信を持っていたからです。

採用に先立って、新垣事務部長から2日間（3時間程度の2回）にわたるオリエンテーションの中で、沖縄セントラル病院の沿革や概況、国の方向性に基づいたセントラル病院の今後の計画等について細部にわたる説明があり、新垣事務部長は平成20年度の診療報酬改定のことも視野に入れた病院事業に精通した方だと思いました。そのオリエンテーションの中で、当院の特色でもあるガンマーナイフ治療（沖縄県では1ヶ所、全国では52ヶ所しかない）のことや、高気圧酸素療法（潜水病の治療や脊髄損傷の治療効果で有効）、パイロット検診、フィットネスセンターのことも説明され、又現在137床ある療養病床の一部（2階病棟の23床）を一般病床にする考えがあるとおっしゃいました。私は、それを聞いて、益々自分の出番だ！“やり甲斐がある”経営に関わる業務につけると思い胸がワクワクしてきました。ガンマーナイフ治療（二三日で退院ができるメスを入れないで放射線を当てて治療をする）は急性期治療なので当然、一般病床で届出をして収益の増を図るべきであり、自分には、看護部と協力して施設基準を取ることが出来る絶好のチャンスと思いました。

それは、病院の経営に関われる歓び、普通は、事務職はメディカルの人やコ・メディカルの人たちみたいに労働生産性に関わることができないが、施設基準関係の仕事の経験豊富の自分にとっては、労働生産性に大いに関わることができるという喜びがあったからです。赴任したら、早速その仕事に取りかかり、第一歩として一般病床への変換を図ることを決意しました。また、診療報酬の査定減を減らし、返戻、過誤返戻、一部過誤を減らし、正当な診療行為に対しては、再審査請求をする仕組みを構築していきたい。さらに、未収金の発生防止、未収金対策から法的手続きまでの仕組みを構築していくことを決意し、さらには、当院は第三者機構が評価する病院医療機能評価の認定やＩＳＯの認定病院なので、評価に恥じないよう継続して、第三者機構から指導を受けたところは改善していきます。また、院長先生が活動されているＡＭＤＡのことも協力をしていきたいと思います。

最後に、薄い褐色のひときわ目立つ６階建ての当セントラル病院に、快く受け入れてくれた院長先生に感謝し、事務部長以下職員と協力して、このセントラル病院の為に前向きに尽力をしていきたいと素直な気持ちでいっぱいです。

病院の基本理念

- ひたすら病める人々のために
- 健全なる人々の更なる健康増進のために
- 集いし職員（トモ）の生涯修養の館たらんことを

病院憲章

(1)私たちの病院は、地域の人々の健康と福祉を保証し、併せて健やかなる人々の病の予防と更なる健康増進のために努めることを目的とする。
(2)私たちの病院は、生命の尊重と人間愛を基本とし、常に医療水準の向上に努め、専門的・倫理的医療を提供するものとする。
(3)私たちの病院は、病める人々中心の医療の心構えを堅持し、地域の人々の満足を得られるように意欲ある活動をするものとする。
(4)私たちの病院は、何人も利用しやすく且つ便益を人々に公正に分かち合うサービスを志向するものとする。
(5)私たちの病院は、地域医療体系に参加し、各々のもてる機能の連携により、合理的で効率的な医療の成果を上げることに努めるものとする。
(6)私たち職員はたゆみない研鑽を積み、医療の錬磨と医道の高揚に努め、限りない愛情と責任を持って、地域の人々のために最善を尽すものとする。

看護部の理念

(1)地域の人々の、疾病の予防と健康増進の為に、検診から在宅看護まで一貫した看護活動をとおして地域に貢献します。
(2)患者の身体的、精神的、社会的ニーズにお応えし、きめ細かな看護、介護の実践を目指します。
(3)患者の人権を尊重し、質の高い看護、介護を提供する為に、看護研修や研究を継続します。

沖縄キリスト教学院大学の元理事として、人材育成、
学院の発展のために貢献した功績により感謝状をいただく。

外　来　担　当　医　師

診療科名	午前／午後	月	火	水	木	金	土
脳外科	午　前	大　仲	大　仲	外　間	大　仲	大　仲	大　仲
	午　後	堀　川	堀　川	外　間	堀　川	堀　川	堀　川
脳外科（ガンマナイフ）	午　前	佐　村	佐　村	佐　村	佐　村	佐　村	佐　村（第1・3土曜）
	午　後	佐　村	佐　村	佐　村	佐　村	佐　村	
内　科	午　前	~~加　藤~~	~~加　藤~~	久手堅	加　藤	久手堅	瀬　尾
	午　後	~~井　戸~~	~~井　戸~~	久手堅	~~瀬　尾~~	久手堅	瀬　尾
外　科	午　前	○	○	○	○	○	○
	午　後				下　地		
循環器内科	午　前			鈴　木			
	午　後	鈴　木				鈴　木	
整形外科	午　前		琉大（整形）		半澤		琉大（整形）
	午　後				半澤		
皮膚科	午　前	琉大（皮膚科）			琉大（皮膚科）		
	午　後						
眼　科	午　前	宮　城		宮　城		宮　城	宮　城
	午　後	宮　城		宮　城		宮　城	
歯　科	午　前	當　間	當　間	當間・仲程	當間・仲程	當　間	當間・仲程
	午　後	當間・仲程	當　間	當間・仲程		當間・仲程	

ドック検診		大仲・井戸	大仲・井戸	大仲・井戸	大仲・井戸	大仲・~~堀川~~	大仲・~~堀川~~

■受付時間／午前 8:30～12:30　午前 13:30～17:30
■診察時間／午前 9:00～13:00　午前 14:00～18:00

◎ガンマナイフセンター　直通:854-5516（内線:217）
◎居宅介護支援センター　直通:855-7200（内線:219）
◎デイサービスセンター　（内線:505）
- 健康増進サービス機関（校正労働省認可）
- 付属リハビリテーションセンター

◎健康管理センター　（内線:214・223）
- 人間ドック
- 脳ドック
- 一般検診
- 特殊検診（航空身体検査・高気圧業務検査）
- メディカルフィットネスセンター「フローゲン」　直通:854-5541（内線:502・504）

R100 PRINTED WITH SOY INK この印刷物は古紙配合率100%の再生紙と環境にやさしい「大豆油インキ」を使用しています。